

カーテンの隙間から差し込む朝の光に小鳥の囀り。そんな爽やかな朝の風景に突然乱入してくるのは、連打される玄関チャイムの音。

ピンポピンポピンポピンポ！

フェイスマンは、ベッドから重い頭を引っぺがして、時計を見た。午前七時三十分。フェイスマンにとっては早朝と言うより深夜に近い時間帯である。

「ふあゝあ。チャイム鳴ってるよ。誰か出てよ……。」

ピンポピンポピンポピンポ！

「はいはいはいはい。」

しかし、フェイスマンが出なければ誰も出ないのは、いつものこと。仕方ないなあ、と一人呟くと、ベッドから出るべく体を起こした。否、起こそうとした。

「う……。」

低いうめき声と共にベッドから落ちるフェイスマン。

「アイタタタ……昨日のエアロビのせいで全身筋肉痛だよ。」

ピンポピンポピンポピンポ！

「はいはいはいはい。今行きますって。」

それでも何とか起き上がったフェイスマン、軋む背中を手にあてがった昔話のお爺さんの姿勢で玄関へと向かった。

「はい、ジェイソンなら今いませ……。」

「遅いっ。」

玄関前に仁王立ちしていたのはキム。

「おはよう。えと、何？」

「遅いわよ。集合は七時半って言ったでしょ。」

「集合？」

「そうよ。今日はエアロビ競技会の本番。八時半には会場に入ってなきゃいけないんだから。」

「……オッケー。ハンニバルね。今起こしてくる。」

フェイスマンは寝癖頭を掻きながら寝室に戻り、ハンニバルのベッドから上掛けを引っぺがした。

しかし、そこに御大の姿はなく、磨き上げられた銀器の数々が美しい光を放つのみ。

「あれ？ ハンニバル、もう起きてるのかな。」

そう言いつつ居間へ行ってみるも、居間も空。コングとマードックの寝室を不躰に開けてみるが、この部屋に

ベッドは二台。ハンニバルが寝ているはずもない。

「あれ、ハンニバル、もう出かけちゃったのかな？ ねえキム、君んとこの依頼ってもう終わってたっけ？」

「だから、これからダンスの競技会だっけ？」

「それは置いといて。」

「窓拭きが途中。」

「……だよね。ハンニバル、もう出かけてるみたいだから、早起きして君んちの窓でも拭きに行ったんじゃないの？ 窓の方、見た？」

「見てない。私も遅れそうだったから。」

「じゃ、きつと君んちだよ。」

というところで、キムと、パジャマ姿でヨレヨレのフェイスマンはキム宅へ。しかし、キム宅の居間には誰もいない。ただカーテンが揺れているばかりなり。

……カーテンが揺れている？ 見れば、庭へ続くガラス戸が薄く開いている。

「何だ、ハンニバル、庭じゃないの？」

「まあ、早起きして作業の続きをしてくれていたのね。気づかなかったわ。」

「そう言って庭に下りた二人。」

「あら！」

「そう言って庭の先を指差すキム。」

「ハンニバル？」

フェイスマンも驚きの声を上げた。

二人の視線の先にあったのは、レオタード姿のまま芝生の上に倒れ伏す御大の姿であった。

「そう言えば、昨夜、ハンニバルを回収したっけ？」

記憶をプレイバックしたフェイスマンは青くなった。

リーダーが一服しに庭へと出た後、フェイスマンは窓を拭きに戻り……そして、気持ちよく窓（内側のみ）を拭き終えて、部屋へと引き上げたのだ。

その間、かなりの間があったにも関わらず、ハンニバルは戻ってこなかった。そして、綺麗に窓（内側のみ）を拭き上げた満足感のあまり、フェイスマンはハンニバルが外に出ていることすら忘れていた。

「……それは、昨夜からずっと……？」

もちろん、普段のハンニバルなら何の心配もない。子供じゃないどころか、仮にも百戦錬磨のツワモノどもの

リーダーなのだ。

でも、老体に鞭打って、三時間も激しく踊り続けた後だとしたら？ それに、このところハンニバルの血圧はかなり高めだったし。さらに、この真冬に戸外で夜を越すのはかなり厳しい。それも、レオタードで！

「うわあ、どうしよう。ハンニバルー！」

おろおろとするフェイスマンをキムが押し退けた。

「退いて！ 叫んでる場合じゃないでしょう。」

倒れているハンニバルの傍らに膝をついたキムは、意外にもてきばきと呼吸を確かめ、脈を取った。

「大丈夫、ちよつとした風邪ね。熱があるけど、大したことないわ。」

「本当に？」

「本当だっけ。こう見えても私、市立病院の看護師なのよ。」

その言葉にフェイスマンは胸を撫で下ろした。そんなフェイスマンにキムが言う。

「さ、それじゃ手伝ってちょうだい。」

「……何を？」

思わず尋ね返してしまったフェイスマンに、キムが呆れたような表情になった。

「忘れたの？ 八時半までに会場に行かなくちゃって言ったでしょ。この人（一生名前を覚える気はなさそう）だを競技会の会場に運ぶのよ！」

「だって、ハンニバルは熱があるんじゃない？」

「熱を下げるには汗をかくのが一番。でも、そうね。いざって時のために、昨日の人（マードックのことらしい）も連れてきてちょうだい。もちろん、あなたも来るのよ。保険は多い方がいいわ。」

市立第二公会堂に向かう車、それはキムの車ではない。なぜならキムの車は故障中で未だ修理がなされていないからだ。したがって、その車は不承不承コングのバン無論、運転するのはコング。ジョギングに行こうかと起きてきたところで捕まえられたのであった。

その助手席で平和に朝のヨーグルトを食べているのは、レオタードの上にパジャマ（クマさん柄）を着たマードック。当然ながら、頭にはナイトキャップ、足は室

内履きのままで!

リクライニングさせた後部シートで毛布に包まれ頭にアイスソンを乗せられてウンウン唸っているハンニバルの横には、看護師らしくハンニバルの脈を取りながら腕時計を睨んでいるキム(しかしレオタード姿)。

「もう八時二十五分よ! あと五分しかないわ!」

「わかってる!」

運転席のコングが答えた。

「ホントにただの風邪なの?」

一番後ろの席で、心配そうにおろおろしているだけのフェイスマンが尋ねる。

「風邪よ!」

キムは言い切った。風邪から肺炎になって命を落とす方々も少なくはないのだが。

「着いたぜ!」

バンがキックと急ブレーキをかけた。市立第二公会堂の正面玄関に横づけされて。

「先に行くわ! あなたたちは後について来て!」

「おう!」

先陣を切って飛び出していくキム。未だ意識混濁のハンニバルの足を持つマードックと、腋を持つフェイスマンが、その姿勢のままバンから躍り出て、体育館へと駆け込んでいく。バンを駐車場へ回すコング。

間に合うのか、Aチーム!

市立第二公会堂の大ホールには、既にカリフォルニア州各地から集まったエアロビック・ダンスサーズが待機していた。キムが八時半二秒前に受付をして、何とか出場権を取り消されずに済んだ彼らであったが……。

「どうすんのさ、キム。」

トイレでレオタードに着替えたフェイスマンが、腕組みをして洗い顔をしたままのキムに尋ねた。ここは公会堂のロビー。行き交う人々、皆レオタード姿なので、レオタードでも恥ずかしくない。

「……まずいわ。この人(ハンニバル)、熱が上がってきてる。熱を下げようにも、意識がなければエアロビで汗をかくことはできないし……どうしようかしら……。そうだわ、あなた(マードック)、売店でアイスレモン

ティ買ってきて。売ったらゼリーかプリンも。バナナでもいいわ。あなた(コング)は、薬局へ行つて解熱剤と体温計を買ってきて。」

「よし!」

命令されて走っていく二名。金持ってるのか?

「エアロビ競技会の方はどうすんのさ?」

なおも尋ねるフェイスマン。

「まだ出番まで時間があるから大丈夫。とにかく、この人(ハンニバル)の熱を下げないと、あなた(フェイスマン)か彼(マードック)と出なくちゃいけない羽目に……。あなた(フェイスマン)じゃ体力が持たないし、彼(マードック)には華がないし……。」

まだ言ってるか。

「出番は何時ぐらい?」

「お昼すぎよ。それまでに、この人(ハンニバル)の熱が下がってくれば、言うことなしなのに。」

熱が下がったとしても、この状態のハンニバルにエアロビさせるのは酷というものじゃなかるか。

「……う、うん……。」

「ハンニバル! 気がついた?」

フェイスマンは、ベンチに寝かされているハンニバルの脇に跪いた。

「フェ、フェイスか……?」

「うん、俺だよ、大丈夫?」

「……そのカエルに水をかけてやってくれ。それから、裏山の金銀財宝は誰にも渡すんじゃないぞ……。」

それだけ言うと、ハンニバルは再び意識を失った。

「……大丈夫なの? ホントに。」

フェイスマンがキムを見上げて聞いた。

「大丈夫よ。」

キムはきつぱりと頷いた。ただし、心ここにあらず、といった表情で。

とりあえず、会場の隅にブルーシートを敷いてハンニバルを寝かせ、毛布が足りないのでさらに上からブルーシートを被せて死体状態にして周囲の方々にびびられているうちに、お使い部隊その一のマードック、帰還。

「買ってきただけ、アイスレモンティとゼリーとプリンと

バナナ。」

と、袋を差し出すマードック。

「ありがとう。助かったわ。」

キムは、そう言うと、袋からゼリーを取り出し、何の迷いもなくカップ上部のセラファンをピリリと剥がして、おもむろに食べ始めた。

「ちよつと待つて。これ、ハンニバルの食料じゃなかったの?」

驚いたフェイスマンがキムからゼリーを取り上げようとするが、あっさり躲されてしまう。

「このゼリー、好物なのよ。」

「好物って!」

さすがのフェイスマンも、いい加減、この女が鬱陶しくなつてまいりました。

『畜生……腰は痛いし、ハンニバルは死にそうだし、エアロビ踊んなきゃならないし、戻っても仕事山積みだし。それもこれも、ジェイソンが仕事放り出してNYなんかに行つてるせいだ。戻ってきたら、ただじゃおかないぞ……。』

心の中でジェイソンに悪態をつきつつ、半分ヤケになりながら、マードックの買ってきたプリンの蓋を開けるフェイスマン。もちろん、ハンニバルに与えるため……ではなく、自分で食うのだ。もう、甘いものでも食わなきゃ、やっつけられないのだ。

釣られて、マードックもバナナの皮を剥き始める。

その時、ブルーシートに包まれたハンニバルが、微妙にうごめいて何かを訴えた。

「ハンニバル! 大丈夫? 意識、戻ったのかい?」

プリンを放り出してハンニバルに飛びつくフェイスマン。

「ふふふ、面倒かけたな、フェイス。」

「ハンニバル。(涙目)」

「しかし、油断はするな。そのオーブンの中身は……プラスチック爆弾? 皆の者、馬を引けい。聖杯を……我が手に……。」

ハンニバル、まだダメらしい。

「買ってきただけ!」

薬局に行っていたコングが息を切らして会場に駆け

込んできた。

「体温計をちょうだい。まず熱を測りましょう。」

「ああ。」

体温計をハンニバルの口に突っ込み、待つこと五分。

「三十九度ちょうど。」

「惜しいわね。」

何がだろう、キム。

「鎮痛剤をちょうだい。」

「ああ。」

コングは、買ってきたばかりの鎮痛剤のボトルから、一回の服用量である三錠を取り出してキムに渡した。

「足りない。あと九錠ちょうだい。」

「九錠？ この薬は一回三錠だぜ。十二錠もどうするんだ。念のために全員飲むのか？」

「違うわよ。この薬が効くかどうかわからないじゃない。だから、四倍の十二錠を飲ませるの。」

「何だって？ やめてくれよ、ハンニバル、死んじやうよ。」

「売り薬で死ぬわけじゃないでしょう。どんなに効かない薬でも、四倍飲めば効くものよ。お祖母ちゃんにそう教わらなかった？」

「教わらなかった！」

「そう。私はそう教わったの。じゃ、行くわよ。」

「あーっ！」

そう言うとキムは、フェイスマンが止める間もなく、錠剤をハンニバルの口に流し入れ、頭を揺すって無理矢理飲み込ませた。

「ふう、これでよし、と。」

キムは、満足げにそう呟くと、紅茶を一口ぐびつと飲んだ。

しかし、心配するフェイスマン、マードック、コングをよそに、ハンニバルが奇跡の復活を遂げたのは、それからたった三十分後のことだった。恐るべし、お祖母ちゃんの知恵。

「本っ当に、もう大丈夫なの？」

不安で不安で堪らないフェイスマンは、もうキムには聞かず、ハンニバルに直接尋ねた。

「ああ、何があったのかさっぱりわからんが、あたしは大丈夫ですよ。」

「ここはどこ？」という風に辺りを見回してハンニバルが言う。言動が普通だ。きっと大丈夫なんだろう。

「ほら、ご覧なさい。」

偉そうに腰に手を当て、胸を張るキム。

「ハンニバル、どこにも不調感じてない？」

どこまでも疑いたいフェイスマンに、ハンニバルが怪訝な顔で答える。

「お前は俺を病気が何かに仕立て上げたいのか？」

いや、病気が下がっただけで、ついさっきまで。と言うか、今も熱が下がっただけで、多分病気なのでは？

「……ふむ、そう言われてみれば、ちよつろ胃が痛いかにゃ。そえと、手の感覚が鈍いような気もすゆ。」

手をグーパーさせるハンニバル。それだけじゃないだろ、とツッコみたい部下三名。微妙に呂律が回ってない。

何となく、偉大なる白黒い無免許医の小さな助手を彷彿とさせる喋り方。

「つい三十分前まで、三十九度の熱がー」

「さあ、それじゃあなた（ハンニバル）、本番前の最後の仕上げよ！」

フェイスマンの言葉を遮って、キムはハンニバルの手を引き、ツイステップでどこかへ走り去ってしまった。

取り残された三名は呆然とするしかなかった。

「……念のため俺は残っとくけど、お前らどうする？」

気を取り直して、フェイスマンはコングとマードックに尋ねた。

「俺ア、戻ってキムの車を直すぜ。何かあることに引っぱ張ってこれれちゃ堪ねえからな。」

コングはそう言いながら、ブルーシートと毛布（両方ともバンに備えつけのもの）を畳み始めた。

「俺っちも仕事片づけるわ。食器磨きと包丁砥ぎは終わったから、次は靴磨きか。」

不満そうに言っているが、恐らく靴磨き中に彼の右手にはソックスが再来し、左手には新人（人？）の「シユー太郎君」が降臨することだろう。

駐車場の方へ向かうコングとマードックの背を見送り、フェイスマンは溜息一つついて、散乱したゴミ（ゼ

リーやプリンのカップ、バナナの皮）を拾い集めた。

マンションに戻ったコングがキムの車を修理して部屋に戻ると、マードックがソファでバナナを食べていた。

「お帰り、コングちゃん。車、直ったん？」

「ああ、ついだにこつちの洗車も済ませといたぜ。」

コングはマジックを取って、依頼リストの一行に横線を引いた。フェイスマンお手製の依頼リストが冷蔵庫のドアにマグネットで貼ってあり、そのうちのいくつかに

は既に取り消し線が引かれている。だが、ざっと見たところ、まだ半分以上が残っている状態だ。

「お前も呑気にバナナ食ってねえで働け。」

「働いてるって。靴磨きに、マフラー編みも終わったもんね。」

コングからマジックを受け取ったマードックが更に二行分を消す。これで進捗はようやく半分近くといったところか。

「これは昼食代わりのバナナタイム。」

胸を張るマードックに、コングが時計を見上げた。

「もうそんな時間か。そう言や、ハンニバルたちの演技は昼すぎって言ってたな。どうせ迎えに来いって呼び出されんだらうし、ちつと様子を見に行ってみるか。一応、ハンニバルの体調も心配だしな。」

「そだね。一応、心配だしね。ちゃんと踊れるんかな、ハンニバル。キムの振りつけときたら、後半、ターンとジャンプの連続で、まさに超絶技巧って言うか、体力との戦いつて言うかさ。」

微妙に異なる心配をしている二人だったが、リーダーを案じる気持ちは一緒らしい。

コングとマードックは連れ立って市立第二公会堂に向かった

その頃、会場では、今しもキムたちの前の組の演技が終わろうとしていた。

「そろそろね。頼むわよ、あなた（ハンニバル）。」

キムがハンニバルを振り返る。

「おう、まかへてふれ。」

よれよれと胸を叩くハンニバル。本番前の最後の仕上

げがいかなるものであったかは謎に包まれたままだが、ハンニバルの消耗振りは相当に激しかった。

そして、遂にキムたちの出番となった。午前の部、最後の組だ。この後、ランチタイムの休憩となるので、観客（それ即ち出場者）も審査員も、集中力が最も欠如している時間である。

一組（二名）の持ち時間は三分以上五分以内。その制限時間の中で、エアロビック・ダンスの技を披露するのである。もちろん、技が高度であるだけでなく、ペアの息が合っている必要もあり、なおかつ観客の目を引きつける華がなければならぬ。

観客の目も、審査員の目も、ハンニバルの腹に釘づけになること請け合いだ！ それは「華」とは言わないけれども。

キムとハンニバルがステージ脇の階段を登り、舞台上にスタンバイした。スポットライトが二人を照らす。拍手もなく、曲が始まった。

ステージの下で、フェイスマンはハラハラとただハンニバルだけを見つめていた。

しかし、フェイスマンの心配をよそに、スポットライトを浴びただけでハンニバルの体の不調はどこかに消えてしまったようだった。あの、太陽のごとく輝く笑顔。ステージを縦横無尽に飛び跳ねるハンニバルの姿は、さながらケセラランパサランようでもあり、まさかその体重が二百ポンドを超えていようとは、フェイスマン以外の誰も思っていなかった。

審査員も、観客も、そしてフェイスマンにも、ハンニバルの笑顔が移っていた。

「な、何だ、こりゃあ？」

ホールに駆け込んだきたコングがドアを開けるなり言った。薄明かりの中で、ステージを見つめる人々の顔が楽しそうな笑顔になっていたからだ。それも、エアロビックの競技会だというのに、まるでライブコンサートであるかのような手拍子を交えて。

「あー、病院でこういうの見たことあるわ。」

一步遅れてやって来たマードックが、コングの後ろからホールの中を覗き見て、冷静にそう言った。

四分半の曲が終わった。打ち合わせ通り、ジャストの

タイミングでハンニバルがキムをリフトして。

拍手の中、ハンニバルはキムを床に下ろし、彼女の手を取り観客に向かって深々とお辞儀をし、それから審査員に向かってもう一度お辞儀をして……そうして、ライトが消えると共にぱたりと床に倒れた。

「ハンニバル！」

駆け寄るフェイスマンと他二名。

市立病院の大部屋で、フェイスマン、コング、マードックの三人は、ベッドの上のハンニバルを無言で見下ろしていた。ハンニバルの腕には点滴が繋がりがり、解熱剤と栄養剤の混じった食塩水がポタリポタリと落ちていく。「やっぱり解熱剤十二錠っていうのは、まずかったよね。」

この部屋に入る前に、事情を聞いた医師がハンニバルの胃洗浄をしたくらいだ。もう遅いと思うが。

「ここ、あの女（キム）が働いている病院だろ？ んなとこに入院して平気なのか？」

コングがフェイスマンに小声で尋ねた。

「キムはまだ公会堂にいるから大丈夫だよ。順位が発表される夕方まで、ずっと公会堂にいるって言うてたからね。俺たちがここにいるってことは彼女に言うてないし、彼女が出動してくるまでに退院すりゃ問題なしさ。」

フェイスマンは力なくハハッと笑った。

「あと窓拭き半分と庭の手入れさえすりゃ、俺たち、あの女から解放されんだね。」

マードックの言葉に、さらに重い空気が立ち込めた。

「……キムの依頼の残りは、幸い全部屋外だ。キムんちの鍵がなくてもできる。……キムが帰ってこないうちに片づけるってどうだろ？」

フェイスマンが提案した。もうキムとは顔も合わせたくない気分。

「ああ、こうやってハンニバルの顔見てたって何にもなりやしねえ。一丁、エイヤッと片づけちまうか。」

「オイラも、それ、賛成。」

三人は通りかかった看護師に「よろしくお願ひします」とにこやかに言うと、病院を後にし、マンションに戻っていった。

冬の短い日が暮れんとする頃、フェイスマンとマードックとコングは途方に暮れていた。場所はマンション一階、キムの家の庭。

「そうひどいことにはなっていないって、彼女言っただけ？」

フェイスマンが乾いた笑いを漏らすも、事実は変わらない。なぜか茨が蔓延っている庭の手入れは、Aチーム三名が午後中働いても終わらなかったのである。

「こりゃ、ハンニバルが足を取られて倒れるのも無理ねえな。」

首に巻いたタオルで汗を拭き拭き、コングが呟いた。

その前に、倒れたらそのまま二度と起き上がれなくなるほど、エアロビックの練習につき合わせたのは、キムなのだ。

「明日の午前中も三人で作業すりゃ、何とかなるんじゃないか？」

ニッカボッカ姿のマードックが両手を腰に当て、そう判定する。

「終わるまでキムが帰ってこないことを祈るよ。」

疲れきった三人はジェイソンの部屋に戻り、食事もそこそこにベッドに潜り込んだ。ハンニバルのことはすっかり忘れきっている。

一方、その頃のハンニバルは。点滴が効いたのか、だいぶ調子もよくなり、うとうととまどろんでいたところを、叩き起こされていた。勢いよく病室の扉を開けたキムによって、である。

「検温の時間よ！ あら、あなた。」

キムは白衣を着ていた。競技会が終わってから夜勤に入ったらしい。

「嫌だわ、解熱剤を十二錠も飲んで胃洗浄された患者って、あなたのことだったの。」

誰が飲ませたかということは、既に忘れていたらしい。「それよりニュースよ！ 私たちの演技、何位だったと思う？」

寝起きのハンニバルに口を挟む間も与えず、キムは捲くし立てた。

「四位よ、四位！ 今まで二十位にも入ったことなかったのに。並みいるプロのエアロビック・ダンサーを差し置いて四位ってすごくない？ もうホント感謝してるわ！」

と、キムはハンニバルの口に体温計を突っ込んだ。

この大部屋に入院しているハンニバルを除く全員が知っていた。今は検温の時間ではないことを。検温の時間は二時間前に終わっていて、食事も終わり、入浴時間も終わり、現在は消灯時間後であるのだ。よほどのことがない限り、喚いてはならない。例え、開腹手術後にくしゃみをして、傷口が開いてしまったかな、と思つた時でさえ、静かにナースコールのボタンを押すよう強制されている。

それに反するのは、常に、看護師のキムただ一人であつた。

「一位から三位の人たちは常連だから私たちが勝てなかったのも無理はないけど、その次の四位っていうのが嬉しいわね。審査員の先生方もね、アマチュアとは思えないほどの素晴らしい演技だつたって褒めて下さつたわ。明日にでも、エアロビック・スタジオからお声がかって、『是非とも、うちのエアロビコースの講師になつて下さい』なんて言われるんじゃないかしら。そうしたら私、こんなところで看護師してないで、とつとエアロビの道に進むわ！」

そんなこと、大声で言つていいものなのだろうか、現在の職場で。それも、入院患者というものは暇を持て余しており、話題に飢えている。しかし、こんな調子で今なおこの病院に勤められるところからすると、多少のことを言つてもキムはクビにはならないのかもしれない。もしかすると、その人並み以上の体力を買われているのかもしれない。何てつたつて、看護師つてのは重労働だ。

「もういいわね。」

時計も見てなかつたくせに、キムはハンニバルの口から体温計を引き抜いた。

「三十七度五分。全然じゃない。何であなた、ここにいらるのよ？ ほら、腕出して。」

血圧測定機をベッドの上にドサツと置くと、キムはハ

ンニバルの腕に黒いバンドを巻いた。そして、そこに聴診器を挟み、シユポシユポと空気を送り込む。

「はーん。こりやまずいいわね。」

看護師の言つていい言葉じゃないぞ。

「百二十の二百四十。普通の人の倍も血圧あつて、どうするのよ？」

そんな血圧の人間に過酷なエアロビをさせたのは、どのどいつでしたつね？

「このままじゃ、あなた、近々死ぬわね。解熱剤を十二錠も飲んで自殺を謀ることもなかったんじゃない？」

耳をそばだてていた周囲の人々は、早くキムがクビになつてくれることを静かに祈るしかなかった。

「自殺する気など端からない！」と言つてやりたかつたが、言つても仕方のないことなので、ハンニバルはキムに何も言わなかつた。競技会で四位になつたのは嬉しいが、それを差っ引いても腹立たしさが残る。滅多に感じない胃の痛みを感じるハンニバルであつた。

昼寝（宵の口の仮眠）から目覚めたフェイスマン、マードック、コングの三人は、今だコロコロコミック並みの厚さの残る依頼書の再検討に入つていた。修理や手伝いなど、比較的簡単な依頼から片づけていたので、残つたやつはどれも面倒臭そうなものばかり。

一応、得意分野分けはできているのだが、得意分野と言つてもお互いに「これはフェイス」「これはコングちゃんね」などと押しつけ合つたものばかりなので、それぞれに不本意感否めないし、既にやる気の九割以上はキムとエアロビに吸い取られた後だし。

「とにかく、ハンニバルが退院するまでに、ちよつとでも進めておこうよ。」

フェイスマンの優等生的な発言の裏には、「進んでなかつた場合、怒られるのは俺なんだから」が潜んでいます。

「そうだな、じゃあ、もう考えずに、俺は俺の分担にかかるぜ。」

と、物わりのいいコング、依頼書の山から無造作に一部抜き取つて席を立つ。

「じゃあ俺様も……これ、かな？」

物わりの普通のマードック、依頼書の山の中から比較的薄めのを抜き取つて言つた。

「オッケー。じゃあ取りかかろう。コングは、どこ？」

「三件隣のマスナンさんちだ。何でも、年寄りにや行けねえ場所にあるとか。モンキーは？」

「一階のクツワダさんち。禅問答と侘び茶の相手が欲しいんだつて。」

「じゃ俺も、一階のエヴェレットさんちでモデルの仕事をしてくる。」

「モデル？ 何でお前だけそんな簡単な仕事なんだ？」

「仕方ないじゃん、『金髪美形に限る』つて書いてあるんだから。」

と、依頼書を突きつけるフェイスマン。それをフェイスマンの手から引つたり、眉間に皺を寄せてその依頼書を読んでいたコングは、満足げに顔を上げ、にっこりと（オエ）笑つた。

「よし、行つてこい、フェイス。あとのことは心配すんな。」

「物わりのいいじゃん、コング。そう来なくっちゃ。」

「やっぱりモデルは俺くらい的美形でなくっちゃね、とウキウキ独り言を呟きながら出かけていくフェイスマン。」

「コングちゃん、いいの？ フェイスにあんな簡単な仕事回しちゃつて。」

悔しさ半分のマードックがコングに食い下がる。

「いいんだ、これ見てみな。」

と、モデル仕事の依頼書の最後のページを捲つてマードックに見せるコング。そこには、一際小さなポイント数の文字でこう書かれていた。

『なお、この仕事には相当の危険が伴います。運のお悪い方はご遠慮下さい。』

「フェイスつてさ、どつちかつてえと、運が『お悪い』んじゃないか？」

「ああ、その通りだ。だが、自分だけ楽しようなんていう不屈な野郎にゃ、相応のお灸が必要じゃないかと思つてな。」

「コングちゃん、ヤバイよ。考え方がハンニバルになつてる。」

ヤバイ、と言いながら、顔は笑っているマードック。そのマードックにニヤリと笑い返すコング。危うし、フェイスマン。

そうして夜明けがやって来て、町が活気づいていく頃、マスナンさんの依頼により、コングは断崖絶壁にぶら下がっていた。もちろん、きちんとロッククライミングの装備をつけた上で、だ。

LAのダウンタウンから車で一時間もかからない場所に、サンガブリエル山地がある。それなりの天文台もある、結構な山だ。その麓に車を止め、ハイペースで山道を歩くこと約二時間。よりにもよって断崖絶壁に可憐なエーデルワイスが群生してやがる。

「エーデルワイスは、連れ合いの好きな花じゃった。」
昨夜、マスナン爺さんは遠い目をして言ったのだった。「二人して山に登り、エーデルワイスを眺めながらサンドイッチを頬張ったもんじゃったわい……。」

妻の命日にエーデルワイスを摘んで、その墓に供えたいと言っただ。無論、コングも「花屋で買ったもんじゃダメなのか？」と聞きはしたが、爺さんは寂しげな微笑みを浮かべて頭を横に振った。

「山登りをする者にとつて、エーデルワイスつちゅつたら、山に生えてなきゃならんじゃよ。」

山と言っても年輩の女性も登れる程度だろうし、そんな山道の脇に生えている花をちょよいと摘んでくれればいいだけかと、コングは甘く見ていた。マスナン爺さんも途中までは道案内として同伴してくれるそうだし。

しかし、今、コングは「年寄りを甘く見ちゃいけない」と実感していた。マスナン爺さん、棺桶に片足を突っ込んでいるような風情だが、朝焼けに照らされた山道をすいすい歩いていくその速さと言ったら。もしかしたら、マスナン爺さんについて歩くのは、キムのダグンスの相手並みにハードかもしれない。

「足腰はまだ若いもんには負けんつもりだが、どうしても腕だけは弱くなってしもうて。」

コングにロープを渡しながら、爺さんはそう言った。「婆さんも、こんな山道をこんなペースで歩いてたのか？」

標高のせいもあつて多少息切れしつつ、コングは問うたのだった。

「あいつは……。」

と、爺さんは太陽の方を見て目を細めた。

「馬車馬のような奴じゃった……。」

コメントする術もなく、コングはロープを伝つて、エーデルワイスを摘みに下りていった。

それより六時間以上前、エヴェレット氏の家のドアチャイムを押したフェイスマンは、玄関先で瞬時にして氏に気に入られた。

「いやあ、金髪って言うにはちょっと暗い色だけど、君なかなかいいねえ。」

フェイスマンの体をベタベタと触る氏はと言えば、いかにも芸術家的風貌の、しかし芸術家と言うにはやけにフレンドリーな男だった。年の頃、四十を少し過ぎた辺りだろうか。

「ジェイソンの友達か何かかい？」

「従兄弟です。」

「ほう、道理で。」

道理で、何なのだろう？

「さ、楽にしてくれたまえ。」

と通されたリビングは、写真撮影スタジオになっていた。天井からシーツのような白い布が、ずるーん、だるーん、と吊り下げられているのを見て、フェイスマンは部屋に干したシーツを取り込んでいないことを思い出した。

「あー。」

早速カメラを手にしたエヴェレット氏に、フェイスマンが恐る恐る尋ねる。

「ちょっとお伺いしますけど、ヌードモデル、とかそんなのじゃないですかね？」

「うーん、そうだな、モデルのイメージによっては脱いでもらうこともあるんだけど、君の場合はヌードよりもチラリズム重視の方がいいかな。」

氏はそう言つて、カメラをフェイスマンに向けた。フライング越しにフェイスマンを凝視する。

「そのままちょっと歩いてみて。そう、そんな感じ。う

ん、いいいいね。はい、止まって。こっちを振り返って。」

指示はされども、シャッターを切る音はしない。

「よし、イメージが固まったぞ。君の服を用意しよう。」

カメラ片手に、エヴェレット氏は隣の部屋に姿を消した。

何が何だかわからず、フェイスマンは部屋の中をふらふらと見て回るしかなかった。そして、スタジオの隅に置かれたテーブルに、皿一杯のチョコレート・トリュフを発見。デミタスカップに注がれたコーヒーマーまで置いてある。

『これ、食べてもいいのかな……？』

あまりにも美味しそうなトリュフに、フェイスマンは心惹かれた。朝方にプリンを食べた後、こっちに返つてきて軽く食事はしたものの、一日の食物摂取量が少なかつたことは確かだ。簡単に言えば、小腹が空いていたのである。

フェイスマンはチョコを一個、口の中に放り込んだ。モゴモゴ。

「う、うえっ！」

チョコを噛んだ途端、中に妙に酸っぱいものが入っていた。果物の酸っぱさではない。その上、何だかプチプチしていて、モジャモジャさえている。その不快さに、思わずフェイスマンは口の中のを掌に吐き出した。

「何だよこれ！」

よくよく見ると、そのプチプチしてモジャモジャした酸っぱいものは、沢山のアリであった。

「ははははは！」

服を抱えて戻ってきたエヴェレット氏が後ろで笑っていた。カウチの上に服を置き、ティッシュとゴミ箱とをフェイスマンに渡す。

「いきなり外れを引いたか。何？ アリ？ それならまだマシだな。」

フェイスマンの手の中を覗き込んで、氏は楽しそうに言った。

「この服に着替えて。そして、その調子で外れを引いてくれたまえ。」

「この服」が単なるスーツであることに安心したフェイスマンだったが、第二センチンスが脳味噌を通過するなり、眉を八の字にした。

「外れを……引け、と？」

「そうだ。君のような美形が、怯え苦しむ様をフィルムに収めてる。こんなチョコは序の口だ。」

では、チョコの後には何が待ち受けているのだろうか？ ロシアン・ルーレットとか？ 黒ヒゲ危機一髪とか？

「まあ、死に至ることはないから安心してくれ。」

死に至りはなくても、近づくことはあるよ、と解釈できなくもない。

危うし、フェイスマン！ アリぐらいで涙目になつてる場合じゃない！

フェイスマンが涙目になりながら、果敢にトリュフと対峙している頃。一階のクツワダさんちでは、マードックが困惑していた。

「あー、ちよいと聞きたいんだけどよ。」

「何でしょう？」

落ち着いて答えるクツワダさんは、マッチョなボディを作業衣に包んだナイスガイ。元は角刈りだったと見られるヘアスタイルは、無造作に伸びた結果、栗のイガそっくりの様相を呈している。それでいて、顔は銀行員風で、フレームレスのメガネをかけていたりする。

向かい合う二人が座っているのは、クツワダ宅のリビングだった。基本的に間取りはジェイソンの部屋と同じはずなのだが、それなりに広いリビングにはソファを始めとする家具が一切なく、タタミが敷き詰められている。

玄関で靴を脱がされたマードックは裸足でそこに正座させられていた。

やはり裸足のクツワダさんは、東洋の神秘「ハリセン」を片手に厳粛な面持ちだった。

「禅問答と侘び茶の会じゃなかったの？」

「いかにも。」

恐る恐る確認したマードックに、クツワダさんは重々しく頷く。

「禅問答も侘び茶も、心の準備が大切なんです。そのた

めにも、まずは座禅から入らなくては。」

「それって絶対に必要なの？」

「絶対に必要です。」

「絶対に絶対に？」

「絶対に絶対に必要なのです。」

言うや否や、手にしたハリセンでビシビシとマードックの肩を打つ。

「さ、座禅を続けてください。雑念が綺麗に払拭されるまで！」

こんな調子で既に三時間が経過していたのだが。

『はあ。問答やお茶なら得意なんだけどなあ。』
内心溜息をつきながら、マードックは座禅に戻った。

『こんなことしてる暇があったら、迷子のペット探しとか、パッチワークとか、他の依頼がこなせるのによ。仕方ねえ、今夜のおかずでも考えるか。』
雑念だらけである。

所変わって、ここはマリアン&オリバーの家。大人しくパズルに興じるオリバーの横で、マリアンはミンシンに向かっていた。

と、そこに鳴り響く電話のベル。

「ハロー。」

『ああ、マリアン？』

「ああ、ジェイソン。どうしたの？」

『いや、家に電話しようと思ったんだけど、自分たちの電話番号忘れちゃって。で、どう？ そっちは。』

「順調よ。あなたの従兄弟、なかなか使えるわね。今、マンション中の雑用で走り回ってるわ。」

『ああよかった！ それなら僕も安心してこっちの仕事に専念できるよ。ほら、ここ一年、僕が忙しくて皆さんの依頼、溜め込んでたんだよ？ 彼には荷が重

いんじゃないかと、ちょっと心配だったんだ。』
「まーったく平気。あの人も、あの人のお友達も、馬車馬みたいに働いてくれてるわ！ ジェイソン、あなた働

き者の親戚がいてよかったわね。」
『うん。さすが僕の従兄弟だ。それじゃ、もう切るね。これから出版関係者とプールサイド・パーティなんだ。』

「オッケー。また何かあったら電話して。あ、そうそう、

あなたの従兄弟、何ていう名前だったかしら？ 忙しくて、つい聞きそびれちゃったのよね。」

『ベック。テンブルトン・ベック。じゃ、彼らよろしく。パーイ。』

「パーイ。」

マリアンは、受話器を置いた。そして、忘れないうちに今聞いた名前をメモに書き留める。

「えーっと、ベック、テンブルトン……TP。もしかして、彼があの有名な『どうして？』のTPなの？ オリバー！ オリバー、大変よ！」

何か、もう一騒ぎありそうなマリアン&オリバー家である。

ジリリリリ！ ジリリリリリ！

大理石と真鍮とでできた洒落た電話が鳴り、エヴェレット氏はそちらに顔を向けると、フェイスマンに「ちょっと休憩」という身振りを示して、電話の方に向かった。

ダークグレーのスーツを着たフェイスマンは、ようやくチョイスした饅頭を手に、ほっ、と息をついた。これまでに、涙目五回、嘔吐三回、気絶一回を経験してきたフェイスマン、スーツは既にヨレヨレのグチャグチャで、濃色のスーツの襟には鼻水と涎とが煌いている。緩めたタイと、第三ボタンまで開いたワイシャツとが、かなりセクスイ。グッジョブ、エヴェレット氏。

「アロー……ああ、マリアンか……ええ、何だって？ 彼ならここにいますけど……。」

氏は送話口を手で押さえて、フェイスマンの方を振り返った。

「君、名前は？」

「俺？ テンブルトン・ベック。」

それを聞くなり、氏は送話口に言った。

「そうだ、間違いない。」

そして再度振り返って。

「つかぬことを聞くが、君、孤児院の出身かい？」

「え？ ああ、まあ、そうだけ……。」

孤児院の育ちだということが、なぜ知られてしまったのか、とフェイスマンは訝しんだ。まさか、ここままでMPの手が……？

「ベトナム戦争には参加したよね？」

「そりゃあ、まあ、アメリカ国民の義務だったし……。」

「おおお……。」

エヴェレット氏の目から、涙がぐわっと溢れ出した。

「マリアン、ビンゴだよ！」

そう送話口に言うと、彼は受話器を置いた。そして、腕いて、手を祈りのポーズにすると、目を閉じて項垂れた。

「神よ、ありがとうございます。ジェイソンを救って下さって……。アーメン。」

フェイスマンには何が何だかわからなかったが、これだけは言える。この変な男とMPは関係ない。関係があるはずがない。あつてたまるか、畜生。

ところで、マリアンとオリバー、それからエヴェレット氏のみならず、このマンションの住人はいづれもジェイソンの『どうして?』を愛してやまない面々の集まりなのであった。ジェイソンのファンクラブと言ってしまうても過言ではあるまい。「TP」と聞くだけで泣けてきてしまうぐらいに。

ジェイソンは、幼馴染みである「TP」のフルネームや、彼がどんな人であるか、決して彼らには語らなかつた。それだからこそ、彼らは「TP」がどんな人物なのか、ジェイソンは「TP」と出会えたのか、気になっていた。

その「TP」が、今、彼らと共にいるのである！

あの「TP」が買物を手伝ってくれて、あの「TP」が車を運転してくれて、あの「TP」がココアを作ってくれて、あの「TP」がレオタードを着て、あの「TP」が涙目で嘔吐しているのである。それぞれにとって、こんな感動はない！

エヴェレット氏に至っては、「あの伝説の人物、TPが、スーツをぐちゃぐちゃにして、涎と涙にまみれて、嘔吐して、気絶して、今、中に何が入っているかわからない饅頭を片手に怯えている」と、妙な興奮すら感じていた。

怪訝に思っているフェイスマンの眼前に、エヴェレッ

ト氏がカメラを持って戻ってきた。未だ彼の目からは止め処もなく涙が零れていて、そしてハアハアと息が荒い。

「中斷して申し訳なかつた。さあ、その饅頭を口へ。」

ハアハアとカメラを構えるエヴェレット氏。フェイスマンは、MPとはまた別の、すつごく嫌いなオーラを氏から感じ取っていた。

「さ、早く！」

氏の期待とは裏腹に、フェイスマンは変なものを食べさせられることに慣れてきてしまっていた。「中に何が入っているんだろう」と悩んでみても、食べるまではわからないのだし、何が入っているようにと食べなきゃならないのだから、躊躇するだけ時間と精神力の無駄だ。ぱくつ、とフェイスマンは饅頭に噛みついた。

モグモグ。

「あ、これ美味い。」

中身はゴマ餡だった。さらに、栗の甘露煮まで入っている。フェイスマンの表情は和らいだ。

その顔は、エヴェレット氏の望んでいたものではなかったが、彼はシャッターを切らずにいられた。饅頭の断面を見てにっこりするフェイスマン、残りの半分を口に入れるフェイスマン、それを幸せそうに食べるフェイスマン、指先をペロリと舐めるフェイスマン、氏に向かつて「残念でした」というように笑うフェイスマン。『か、可愛い……。』

この瞬間だけで、やたらとフィルムを消費してしまつたエヴェレット氏であった。

今までとは別の意味で、危うし、フェイスマン！

マリアンはエヴェレット氏との電話を終えるや否や、行動を開始していた。キツチンの引き出しから真っ赤なボードを取り出し、古新聞のストッカーから裏が白いチラシを探して挟み込む。

「はい、ママ。」

オリバーが差し出した極太油性ペンを受け取ると、チラシの上半分に大きく「緊急事態勃発！」と書き込んだ。次いで、その下に「TP確認！ オペレーションWTPP発動！」と追記する。

「さ、これをミラーさんに持って行ってちょうだい。」

急いでね。」

「わかっている。」

マリアンは、ボードを片手に二階の端の部屋に駆けていく息子を満足げに見送った。

赤いボードは、このマンションの、と言うより、ジェイソンとTPファンクラブの面々の、緊急回覧板である。マリアンを会長とする彼らはかねてから、もしもTPに出会える日が来たら、熱烈歓迎しようと言いついていたのだ。

なぜなら、TPがいたからこそ、そしてTPとジェイソンの友情があつたからこそ、感動の名作『どうして?』が生まれたのだから！ ジェイソンが『どうして?』の生みの親なら、TPだつてその片割れである。

彼らがマンションのバーベキュー大会で盛り上がった折にその計画は発案された。

オペレーションWTPP、即ち「ウェルカムTPパーティー」である。

「さして、忙しくなるわよ。」

腕捲りしながらマリアンは呟いた。

そんな時代のうねりを知る術もなく、ハンニバルは、市立病院の大部屋で一時の安らぎを甘受していた。ご飯は不味いし楽しいアトラクションもないけど、静寂は売るほどもあるこの病室。普段から慌しい日常を過ごしているハンニバルにとっては、神の恵みとも言うべき一人の時間である。

「いいですねえ、この雰囲気。最近、病院と言えばモンキーンとこくらしいしか行つてなかつたから、病院がこんなに静かだつてこと忘れてましたよ。」

思わず独り言も出るといふものである。

と、その時、カーテンを引かれた隣のベッドから、ウホン、とわざとらしい咳払いが。静かにしてくれ、つてことだろうか。

「おやおや、済みませんねえ。あんまり静かなもので、つい。」

ハンニバルは、カーテンの向こうの人影に向かってそう言うと、ベッドサイドの葉巻に火を点けて一服。

と、今度はお向かいのベッドから、ウホン、と咳払い

が。

「おっと。禁煙でしたね。ゴメンゴメン。」

慌てて火を消し、葉巻を寝巻の胸ポケットにしまった。お喋りダメ、喫煙ダメ、となると、いきなり手持ち無沙汰になる御大。完全回復とは言わぬまでも、しばらく休んだ結果として体調はかなり回復してきているし、そうなる。「いい」と思っていた静寂が鬱陶しくもなってきた。幸いなことに、キムも仕事を終えて帰ったようだし、ちょっと飲み物でも買ってきませうかね、と、起き上がり、ベッドから足を下ろした。が、その瞬間、ハンニバルの足元になぜか置いてあった空き缶が倒れてカラカラと音を立てた。病室に、ウホンウホンの合唱が響く。ハンニバルは、溜息をつく、諦めて再度ベッドに体を横たえた。

『やはり、作戦もなしに行動を起こしてしまったのが敗因だろう。』

薄べったい毛布を引き上げて、ハンニバルは考えた。ここ数分の自分の行動について、だ。反省すべき行動は、もっと前に山とあつたけど、それはもういいとして。『ウホンウホン攻撃に遭わないようにするためには、どうしたらいいか。一、咳払いをする輩を抹殺する。二、咳払いをされないように奴らの口を塞ぐ。三、咳払いされないように奴らを懐柔する。四、あたしが静かにする。……四を採択すべきだな、真つ当に。』

というわけで、ハンニバルは静かにしていることに決定した。しかし、静かに「寝ている」とは限らない。

ハンニバルは静かにベッドの周りを見た。幸い、消灯後ではあるけれども、仄かな明かりだけは点いていて、周囲を見回すのに不自由はない。床に転がっていたのは、アイスレモンティの缶だった(恐らくキムが置いていたもの)。それをベッドの下、中ほどに立てておく。

それからハンニバルは、自分の荷物を探した。病院指定の寝巻を着ているのだから、ここに来た時に着ていた服がどこかにあるはずだ。だがしかし、ここで意識を取り戻す前の記憶と言ったら、キムとエアロピ競技会に出た時のものが最新だ。つてことは、ここに運ばれてきた時に着ていた服は、レオタードということだろう。そんなものに、最早、興味はない。病院で確固たる意識を持

ってレオタードを着ていたら、それはキム以下の人間だろう。キムですら、病院ではナース服を着ているのだから(その下はレオタードかもしれない)。

他に財布や金目のものは持っているはずがなかった。そういうものは常にフェイスマンが持っていてくれる。ハンケチやちり紙も、常日頃から携帯してはいない。あとは葉巻だけ。その葉巻は、今、寝巻のポケットに入っている。

つまり、今この状態で病院を抜け出しても、ハンニバル的には何の問題もない。むしろ、抜け出したい。静寂なんて、どこか他の場所にもあるはずなのだから。独り言を言っても、葉巻を吹かしても、ウホンウホン言わない場所が。

そんなわけで、ハンニバルは慎重に行動を開始した。作戦は、こうだ。ベッドの下にあったスニーカーを履き、毛布と葉巻を持って、できる限り静かにベッドを下り、こっそりと病室を出る。医者や看護師に見つからないように、こっそりと非常口へ向かう。非常階段を下りて道路に出て、現在位置を確認。徒歩でマンションに向かうか、もしくはタクシードでマンションに向かう。残っていたレオタードは、キムが回収するだろう。

完璧な作戦だ、と満足し、ハンニバルはスニーカーに足を突っ込んだ。

マリアンが流した緊急回覧板は、光の速度を多少下回る速さでマンション内を駆け抜けた。そして、そこからLA内の、いや、カリフォルニア内の、いや、アメリカ合衆国内の、いや、世界各国の『どうして?』愛好家たちに緊急連絡が伝えられた。主に電話で。

当初マリアンは、ウェルカムTPパーティー(WTPP)はマリアン&オリバー宅でクリスマスマスに、クリスマスパーティーを兼ねて行おうかと思っていた。マンションのメンバーを招いて。しかし、事態はそんなミニマムなレベルでは済まないことになってきていた。

「パーティーにぜひ参加したい」と言ってくる国外のファンも多く、「うちのパーティー会場を使ってほしい」という申し出や「うちのレストランの料理をぜひ二人に味わってほしい」という申し出も後を絶たない。

既にマリアンはクリスマス料理の準備を放棄し、電話受付嬢と化していた。オリバーは、と言うと、このマンションの中を駆け回っていた。刻々と進展していく事態を各所に報告して回るのが彼の役目だ。

『コングおじさん……ハンニバルおじさんでもいいや……十歩譲ってモンキーおじさんでも構やしない……百歩譲ってフェイスでもいい……誰か手伝ってー!』この際、グデイでもいい!』

そう、オリバーには父親がいるのだ。つまり、マリアンの夫が。今はアブダビで仕事をしているのだが。

そしてこの時、コングおじさんは実はマスナン爺さんのお宅で事情を伺っている最中、モンキーおじさんはクツワダさんちで精神統一中、フェイスマンはエヴェレット氏のスタジオで、パイに入っていたかりんとうを猫の糞だと勘違いして吐いている最中であつた。

そんなわけで、マンション前にタクシードを乗りつけ、すつくと降り立ったハンニバルが最初に出会ったのは、オリバー少年だつた。

「あ、ハンニバルおじさん!」

ハンニバルを見たオリバーは、一瞬嬉しそうな笑顔を浮かべたが、すぐに複雑な表情になった。確かに手伝ってくれる人は募集中だ。だが、病院指定の寝巻にスニーカーという、どう見ても徘徊老人なこの人物が、果たして戦力になるだろうか?

そんな少年の苦悩には気づかず、ハンニバルは極めてにこやかに手を挙げた。

「やあ、オリバー。いいとこで会った。悪いんだが、フェイスを呼んできちゃくれんかね。」

もちろん、タクシードを払ってもらうため、である。しかし、オリバーは悲しげに首を横に振った。

「ダメだよ、フェイスは今、忙しいんだもん。」

エヴェレット氏のスタジオに連れ去られた者は、大抵一昼夜は解放されない。そして気の利くオリバーは、「コングおじさんもモンキーおじさんも見つからないんだ」と言い添えるのも忘れなかった。

「何? 仕方ないな。それじゃ、オリバー、済まんがお前さんがタクシードを立て替えてくれ。」

ちっとも済まなくさそうな調子で、ハンニバルは年端もいかぬ少年に無心する。

「えーっ、僕、お金なんて持ってないよ。大体、ハンニバルおじさん、お財布持たずにタクシー乗ったわけ？」

「その通りだ。」

胸を張るハンニバル。そこは威張るところではありませぬ。

「ダメだなあ、大人のくせに。しょうがない、ママに頼んでお金借りてくる。ちゃんと後で返してよ？」

さすがオリバー少年。マリアンの子息だけあって、この辺りはしつかりしている。

オリバーがドアを開けて駆け込んだ時、マリアンはちよと受話器を置いたところだった。

開口一番の子息の台詞に、マリアンの眉間に皺が寄る。

「ママ！ お金貸して。」

「今月のお小遣いはもうあげたでしょ。」

「そうじゃなくて。」

「じゃあ何よ。一体、何に使うの？」

腰に手を当てたマリアンがオリバーに詰め寄ろうとすると、電話のベルが鳴った。

「ああ、もう。」

マリアンは慌てて受話器を取り、残されたオリバーは途方に暮れた。

オリバーが途方に暮れている間、ハンニバルもまた、途方に暮れていた。待てど暮らせどオリバーは戻ってこない。従って、お金はない。なので、運転手の視線は痛い。因みに、この時点でオリバー少年が消えてから十分

以上。かの少年は、既にハンニバルのことなど忘却の彼方でおやつを召し上がっている。そんなことは知らぬ御大、いつものようにのんびりと場の好転を待つのであった。イカスね、ハンニバル。しかし、迷惑なのがタク

シーの人。

「お客さん、早く払ってよ。こっちも忙しいんだから。」

南米移民風のタクシー運転手が貧乏ゆすりをしつつハンニバルを急かす。

「まあお待ちなさいよ。狭いL A、そんなに急いでどこ

へ行く、って言うじゃありませんか。」

「どこへ行くって、仕事に行くんだよ。こちらら、最近大手の会社に客取られっ放しで売上げが下がってるんだから、せめて数くらいこななきや生活して行けないってんだ。」

「ああ、この不況だからね。ま、ちよと一息入れて待っててよ。」

と、のんびりタクシーに寄りかかかって葉巻を吹かすハンニバル。パジャマでスニーカーな点を除けば結構格好いいかも。

そしてまた十分経過。そろそろハンニバルの顔にも焦りの色が。

二十分経過。ハンニバルと運転手、並んで貧乏揺すり。三十分経過。

「もう待てねえ、おっさん、乗れ！」

運転手が叫んだ。

「乗れ、って、どこ行くのよ？ あたしやそのマンションに行きたいのよ。」

「どこって、病院に決まってるじゃないか。あんた、大方、病院から脱走してきたんだろ？」

「……まあ、そんな感じではあるけど。」

「だったら、病院に戻れば金はあるんだよな？ 戻るか、そこで代金を払ってくれ。もちろん往復の分だ。でもって、財布持ったら、改めてここまで送ってやるから。」

何気に三倍の稼ぎをせしめようとしているのではないか。しかし、そんな運転手の目論見は、ハンニバルの次の一言で脆くも崩れ去った。

「病院にも、金は、ない。あたしやこう見えても、救急患者だ。入院した時に持ってた物と言ったら、レオタードとヘアバンドくらいのもんだし。」

「オオマイガ！ 何てこった！ 何てツイてないんだ、俺は！」

そう言っただけでその場にへたり込む運転手。その肩にそつと手を置いて慰めるハンニバル。

「まあまあ、気を落とさなさんな。何も、払わないって言ってるわけじゃないんだ。ちよと、いろんなタイミングが悪いだけで、部屋に帰れば金はある。ただ、そ

の部屋に入る鍵を持ってないだけで。」

そう言うハンニバルの言葉に、運転手は顔を上げた。

「あんた、このマンションの住人かい？ 見かけない顔だけど。」

「住人って言うか、ちよと間借りしてる者でしてね。」

「てことはあれか、ジェイソンの代わりってのは、あんたのことか。」

「正確には、代わりの友達だ。」

「おお！」

と、立ち上がる運転手、今までの気落ちした態度とは打って変わって快活かつ元気にハンニバルの手を握り締め、そしてブンブン振った。

「そりやちよとよかった！ 俺はフリオ・コレード。このマンションの一階の住人だ。回覧板は見たんだが、仕事が忙しくて依頼書を書く暇がなかったんだ。じゃあ早速あんたたちに頼みたいことがある！ さあ、乗ってくれ！」

そう言う運転手は、タクシーの後部ドアをガバツと開け、ハンニバルをとーん、と突き飛ばして後部座席に突っ込むと、いそいそと運転席に乗り込み、車を急発進させた。

「実は、うちのカミさんが産気づいちゃって、それも三日も前からだ。今産まれる、もう産まれる、って三日も続いてて、俺の気持ち、わかるか？」

運転手フリオは前を向いたまま説明を始めた。

「いんや。」

カミさんも子供もいないハンニバルには、さっぱりわからない。子供なんて、コウノトリが運んでこようがキヤベツから生まれようが、どっちだって構わない、というスタンスだ。

「そうか。ま、簡単に言えば、仕事なんかしてないでカミさんにつき添っててやりたいわけだ。子供が生まれる瞬間に立ち合っただけでいいよ。」

「ふむ。それで、あたしにつき添ってほしい、と。」

ハンニバルは腕組みをして、納得したように頷いた。

「いやいや、つき添うのはこの俺で、あんたには俺の代わりに働いてほしいんだ。」

「あたしがタクシーの運転手？」

「それだけじゃない。今、家には長女が一人つきりなんで、食事の世話や、それからクリスマス準備やらも。」

いつもはこの時期、シーズナルな準備は妻に任せっきりのフリオとしては、具体的に何をすればいいのやら、ほとんど把握していない。一応、敬虔なクリスマスチャンなんだが、仕事が仕事なもので、クリスマスミサにさえ、アメリカに移住してきたからは足を運んでいない。そのバチが当たって、妻が難産で苦しんでおり、仕事も上手く行っていないのだ、とフリオは信じていた。

「その長女は、ユリアとかいう名前か？」
フリオの話に思い当たることがあって、ハンニバルは尋ねた。

「ああ、そうだ。知ってるのか？」
「依頼書が来てたよ、スペイン語と英語のチャンポンで。実に印象深い文面だった。」

昔を懐かしむかのように、ハンニバルは窓の外を見つめた。

「母親が入院していて、父親は仕事の鬼なので、クリスマスと一緒にいてくれる人を募集中、ということだった。確か。括弧の中に、できれば家族揃ってクリスマスを通じたい、と書いてあったがね。確か。」

一人当たり十通ぐらい依頼書に目を通したので、記憶が曖昧なハンニバルであった。

「そうか、ユリアが……。」

フリオは口許を綻ばせたが、それはハンニバルには見えなかった。

「あんたが俺の代わりにタクシーの運転手をやってくれば、俺はガブリエラにつき添ってやれるし、ユリアと一緒にクリスマスを過ごすこともできる、かもしれない。そうすれば、ユリアからの依頼もこなせて一石二鳥だ！」

「子曰く、二兎を追う者は虎兎を得ず。」

「……俺が言うのも何だけど、それ、違うと思うぞ。」

「あたしも、違うんじゃないかと思ってたのよ。」
そんなわけで、依頼を消化すべく、ハンニバルはフリオのために一肌脱ぐことにした。かつ、依頼数三十一件になりそうなところを、二件一まとめにして、依頼数三十件をキープ。

コレード家の第二子が既に生まれていけば話は簡単なんだが、そうスムーズに事が進まないのが世の常。頑張れ、ガブリエラ！

そして、フリオの運転する車は再び市立病院へ。なぜなら、ガブリエラが入院しているのは、この病院の産婦人科であったからだ。

軽やかに車寄せに停車したタクシーから、フリオはいそいそと飛び出した。

「それじゃ、あとは頼むぞ、兄弟。」

振り向きざまに帽子を投げるフリオ。

「おお、任せなさい。」

ハンニバルが受け取った帽子を頭に乗せる。かくして、一見普通だがよく見るとパジャマ、しかも足元はスニーカーというタクシー運転手が出来上がった。運転席に座っていれば、まあ気にならない、かもしれない。

フリオに向かつては、やる気満々な返事を返したハンニバルであったが、次にしたことと言えば、タクシーに寄りかかって葉巻に火を点け、ゆつたりと仕事前の一服を楽しむことだった。

そしてそれは、病院から出てきた客が他のタクシーを見つけれず、ハンニバルに声をかけるまで続いた。

数時間経過。

コングは腹部を摩りながら、マンション二階の自室、もとい、ジェイソンの部屋に戻ってきた。マスナン爺さんの長い長い、しかも行きつ戻りつする思い出話を拝聴していたのはともかく、その間、ひっきりなしに茶を勧められて、すっかり腹タポタポになってしまった。

ソファに腰を下ろし、ようやく一休みできる、と思っただのも束の間。
電話の呼び出し音に仕方なく腰を上げると、妙にハイテンションなハンニバルの声が響き渡った。

「すぐにカーナビを持ってきてくれ！ 場所？ それ

がわかったら困つたらんわ。」

とりあえず、ハンニバルにはその場所から動かないように指示をして、周りが見えるもの（できれば道路名が書かれた立て札）を報告させ、コングは受話器を置いた。

カーナビ、即ちカーナビゲーションシステム。当時、

一九八五年前後には一般民衆にとってそんなものは夢のまた夢であり、映画や小説の中でしか存在しないものと思われていたが、ところがどっこい、NASAは既にそのシステムを開発していたし（宇宙空間に一方通行はない、と気づいていなかったにせよ）、コングも独自の手法によりカーナビを作製していたのだった。

コングの手によるカーナビは、ペンプロローブ一本とピン二本と地図とから成っていた。それから、プロローブやピンのコードが繋がっている機械が一台。それをバンの後部から探し出し、そのバンに乗ってコングはハンニバルの待つているだろう地点に向かった。

因みに、現在、深夜一時。オリバーが駆けずり回っているけど深夜一時。オリバーがちよっと前におやつを食べていたけど深夜一時。あと三時間ほどしたらコングはマスナン爺さんと共に山登りをしなくてはならないのだ。さつさとハンニバルにカーナビを届けて一眠りしたいコングであった。

ハンニバルがいるはずの場所に、ハンニバルはいなかった。もちろん、そんなことはコングにはわかっていた。その近辺を最終行で流す。十分もしないうちに、ハンニバルは見つかった。路肩にタクシーを停め、それに寄りかかって葉巻を一服している、パジャマ姿の、恰幅のいい白髪男が、ハンニバルでない可能性は低い。

「おう、持ってきたぜ。……で、何に使うんだ？ つーか、その格好は何だ？」

「依頼の一環で、タクシーの運転ちゃんを頼まれてな。」

「その車にカーナビ積むんだな？」
ハンニバルの答えが何であれ、コングは話を先に進めるのであった。疑問は多々あれど、納得行くまで説明を聞いていたら、マスナン爺さんとの約束の時間に間に合わないこと請け合いだ。

コングはタクシーの運転席にカーナビを取りつけた。

そして、ハンニバルに使い方を説明する。

「ピンの一つを地図の現在位置に刺して、もう一つを目的地に刺す。そして、このペンで、現在位置から目的地までの道をなぞる。あとは、この機械に表示される矢印の向きに従って行けば到着する。わかったな？」

「ああ、わかった。」

「じゃ、俺ア帰って寝るぜ。」

「おやすみ。ご苦労さん。」

そうしてコングは帰っていった。

「さあ、お客さん、お待たせしました。」

と、ハンニバルは後部座席の客を見た。やけに静かにしている、と思つたら、かなり高齢のご婦人は、左胸を押さえて軋めつ面でシートに横になつていらつしやうた。

早速ハンニバルは地図を広げ、ピン的一本を現在地に刺し、もう一本を市立病院に刺すと、その間の道をベンでなぞつた。

ハンニバルの咄嗟の判断のおかげで、心臓発作を起こしたご婦人、ミセス・ハイデンは命を取り止めた。胸が苦しい、と市立病院の夜間急患窓口を訪れた矢先の出来事であった。

幸い、タクシーの運転手（ハンニバル）がこの病院のバジャマを着ていることは誰にも指摘されず、従つてハンニバルが病室に連れ戻されることもなかった。

「いやあ、助かつてよかったですねえ。一時はどうなることかと思ひましたよ。」

再びタクシーに乗り込むミセス・ハイデンに、ハンニバルは手を貸しながら明るく言つた。

「入院することもなく、電気ショックと注射と吸入だけで家に帰れるとは、素晴らしい蘇生力！ いや、素晴らしい生命力！」

褒めているつもりでハンニバルに、未だぐつたりとしている彼女は、それでもきつぱりと言つた。

「お黙りなさい、坊や。」

そう、彼女にとってはハンニバルさえも「坊や」なのである。

「あなたが、タクシー運転手のくせに、道がわからない、なんて言うからですよ。それもこんなに寒い中でいつまでも待たせて。あなたのせいで心臓発作を起こしたと言つてもいいほどなんですからね。」

後部座席に体を落ち着け、彼女はフンツと息をついた。「さあ、車を出して下さいな。そして今度こそ、私を目

的地に連れて行きなさい。」

「ええと、その目的地つてのは、この地図のどこでしょうね？」

と、ハンニバルは彼女の前に地図を開いた。

「ここよ。」

皺と染みだらけの指先で、つと指された地点に、ハンニバルはピンを刺した。

車を発進させ、カーナビの指示通りに進む。そして到着したのは……例のマンションだった。

さて、その頃の残り三名はと言えば。

フェイスマンは、ミントジェリーで一杯の浴槽（猫脚の優雅なおフランス製）にずつぱり首まで浸けられて、エヴェレット氏に写真を撮られまくつていた。

「はい、笑つてー！」

にっこり（ムリのある笑顔）。

「はい、次は立ち上がってみよう。あ、見せちゃいけないところはジェリーで隠してね。パーティー会場に飾るんだから。」

「パーティー？」

「いいのいいの。はい、笑つてー。」

ニカ（誰かのような笑顔）ニカサムアップ。しかし全裸。

「いいねー。さすがだよ、君。」

バシャバシャバシャ。こうして、破廉恥つて言うか一生の恥つて言うか、まあそんな感じの写真を増やしていくフェイスマン。その写真が何に使われるものかも知らずに。

で、その頃のマードックはと言えば、未だに座禪、続行中。そしてコングも、断崖絶壁からぶら下がり中。完全に依頼の遂行は停滞していると言つてよからう。座禪も、歳寄りの繰言も、引き際の難しさでは一、二を争う事柄であるからして、仕方ないことかもしれない。

所変わつて、ここはオリバー&マリアン家。リビングの壁には、大きな模造紙が貼りつけられ、オリバー&マリアン親子、キム、および、ご近所から集まった『ジェ

イソン・ヒックス&TPファンクラブ』の皆様により、WTPPの打ち合わせが熱く行なわれていた。

「じゃあ、会場はハリウッド・ルーズベルト・ホテルで決まりね。さつき支配人と話をして、一般参加者から入場料を取れば、会場使用料はチャラにしてくれるつて。」

マリアンが、ポインターでピシッと模造紙を打つ。

「悪くないわね。」

と、キム。悪くないどころじゃない、ハリウッド・ルーズベルト・ホテルは、アカデミー賞の授賞式などが行なわれる超VIPホテルである。

「じゃあ、宣伝を打つておかなきゃ。うちの病院の患者さんに、ケーブルテレビの会長がいるから、頼んでみるわ。朝昼晩、少なくとも一日三十回はスポットCMを流さなきゃ。」

「オッケー、キム、宣伝の件はお願い。」

「で、マリアン。」

「何？」

「ついでに、つて言うか、ものは相談なんだけど、その……WTPPで、私、踊つてもいいかしら？」

「TPと？」

「違う違う。私と一緒にエアロビ踊つた彼とよ。せっかくエアロビ大会で入賞したんだし、ここで顔売つておきたいのよね。」

「いいわね！ 出し物は多い方がいいし、ぜひお願いするわ、キム！」

こうして、Aチームの誰一人知り知らぬところで、恐ろしい計画は着々と進行してゆくのであった。

【つづく】